

アニエス・コンダの論文のレビュー

Approche psychodynamique du trouble déficitaire de l'attention-hyperactivité (TDAH), à partir de l'observation clinique Agnès Condat Perspectives PSY, 2011/1, Vol. 50, PP. 32-41

についてのレビューを書きました。タイトルは『ADHDの精神力学的アプローチ - 臨床的観察を通して』、アニエス・コンダはサルベトリエール病院勤務、主任教授、D. コーエンのもとで小児青年期精神医学専攻、国際ラカン協会の会員で精神分析家です。ADHDのフランスにおける精神分析領域における研究ははなはだ蕭条たる状況にあり、特に成人期ADHDについては皆無ではないでしょうか。この原因のひとつとして、HAS(Haute Autorité de Santé)という外郭団体(日本では外郭団体といえは何か某省の外郭団体となりますが、彼の地では同様に縦割り構造となっている行政を政治家が横にスバツと切り、例え健康保険関係の外郭団体だとしても日本だと厚労省が一番近いといえるMinistère des Affaires Sociales et de la Santéとの関係は薄く、Collègeという集団(計8名の会員、共和国大統領、国民議会(日本でいう衆議院)議長、元老院(日本でいう参議院)議長、経済・社会評議会議長が各2名ずつ任命することになっている)を中心として審議が行われます。法人格としては独立行政法人にちかいかもかもしれませんが、日本にはこれだけ権限をもった独立行政法人は存在しません。このHASがADHDに対しては精神分析が無効だという声明を発表したから大変です。多くのラカニアンたちは「そもそもADHDなんて物は存在しない」と短絡的な反応を示し。さらに「アレン・フランセスは正しい」とまで言う始末です。この問題については別稿で述べることにしますが、差し当たり数少ないラカニアンが書いたこの論文を紹介し、やや批判的に読むことにします。

この論文が書かれたのは2011年です。DSM-5発表以前です。しかしながらADHDが神経発達障害の回分類に該当するとしている研究者についても触れている部分があり、他のラカニアンとは異なり、精神医学と精神分析の狭間でなんとか折り合いをつけていこうと厲心する姿が見られます。

コンダが扱っているのは子ども(一部思春期例も含まれているのかもしれませんが、ほぼ多動に焦点を絞って述べています)のADHDに限られています。まず第一に子どもや若者が自ら、治療者が分析家であろうとなかろうと、治療を求めてやってくることは稀であるという事実からスタートします。

諸症状が列挙されていますが、これはDSM-IVRとDSM-5との間にたいした差がないのでここでは割愛いたします。断っておかなくてはならないことは、たとえコンダが子どものADHDに対象を絞って論じ、成人期のADHDにおいては多動、衝動的な問題は背景に退いて、仕事上問題となるのは不注意に関連した諸症状であるとしても、多動がなぜ問題なのか、どのような構造的意味を持つのかが問われています。現象面でもひとつだけ、小生が注目したいのは、これも多動の項目にカテゴライズされていますが、「やめてはいけないことを周囲(親、教師、同級生)から言われても、それを聞かない・・・il ne l'a pas repris à son compte」といった指摘です。すでに書きましたが(『成人期ADHDについて』参照してください)、日本語の「き-く」は複数の漢字が当てられていて、この複数の「き-く」能力がすべてカヴァーされたかたちで問題が生じてくることは、例えば中途失聴者のケースにも共通しており(かれらも他人の言葉に対して、ちゃんと聞こえていない - ことが多い - のに、安易に「はい!」と言ってしまい、その後で相手は何を言ったんだろうと推論に推論を重ね、しばしばその相手が言ったこととかかけ離れた地点にまで思考が及び、收拾がつかなくなり固まってしまいかんともない答えで応ずるかです)、結局、「聞いていないんじゃないやあなまきか」と非難されるのです。この傾向からADHDがヘレネ・ドイチエHelene DeutschがいつているようAls-Ob Persönlichkeit, As-If Personalityとの関連で論じることができません。これは転移transfertの問題とも絡んできます。コンダはこのような問題にはまったく触れていません。因にフランス語-日本語の対応について一寸触れます。しばしばフランス語entendre は日本語で「聞く」、écouterは「聴く」と画一的に誤って理解している人もいますが、例えば学校の先生が生徒たちに「両親の言うことを聞きなさい」「聴きなさい」と書けば、単に注意して聴くことであり、両親の言葉に従うかどうかはその後のマターです)はフランス語ではÉcoutez vos parentsです。「き-く」についても稿を改めて書きます。

ついでコンダは多動つまり運動における「過度」le tropと注意における「欠如」l'absenceといったアンチノミーが共存することが症候群としては一貫性に欠けているようにみえるが、この相反するクライテリアを結びつけるものが無 - 意味le non-sensなのとしてしている。アンチノミーとか一貫性に欠けるとかいった表現のコントラストをここでことさら強調するのは如何なものかと首をかしげるを得ません。臨床的にいわずに層理論的にとらえることのようなコントラストは枚挙の暇もないのですが、ここで例証はしません。ひとつ言わせていただければ、精神分析理論も層理論によって成り立っているという事実を否定する者はまったくいないであろうということです。le non-sensについてコンダは依拠しているのであれば、後期ラカンの意味le sensについて、臨床的にきちんと説明しなくてはならない筈ですが、ここが欠けています。単に欠けているのではなく、ラカンが「意味」を精神分析の奥地という経験の場でどのように捉えていたか、どのように戦略的に用いていたかが明らかにされれば、かの女のこの論文は整合性がなくなってしまうのです。「意味」については、後述することとなるjouissanceという語(日本語では「享楽」という訳が定着していますが、これはまずいです。小生も今までこの定訳を用いてきましたが、plaisirを「快楽」と訳したのであるなら(最近「快感」の訳が多いですが)jouissanceの訳として「楽」という漢字が入っている訳語が罷り通っている現実をまっとうならラカニアンなら誰でもこれはおかしائيと思つてはいるはずですが、どうも日本には翻訳文化という伝統みたいなものがあって、テクニカル・タームは大抵二字熟語とする暗黙の了解が働き、やはり小笠原さんみたいに「__徴」、「__想」、「__美」では盛りが悪いということになるのでしょう。とついで小生になにかアイデアがあるという訳ではなく、jouirは「__享ずる」と訳すとしてjouissanceは片仮名で「ジューツァンス」と表記して行こうと思つています)と同様、次回のアップの際、このコンダの論文の批判の意味も込めて説明したいと思つています。

暫くは差し当たりコンダの論文に書かれていることを要約します(ラカン解釈において間違っている部分がありますが、一応筆者コンダの趣旨に沿って認めます(以下、黒色は主としてパラグラフごとのオリジナル文の拙訳、緑色は小生のコメントです)。

「居てはならないところに居る」・・・là où il ne devrait pas êtreとは「意味」le sensをなさないモード上にある。これは言い間違いlapsusとか失策行為acte manquéとは異なり、そもそもこの種の子どもの「場違い」は行為acteですらない。不注意に関しても、ディスクールのなかに記された喪失la perteといった意味のものではない。喪失といえども意味をもっているものであり、そのことが主体の場所を与えるはずだからである。不注意も断絶coupureをもたらすものではない。不注意も同様にある意味に一致しているのではない。多動と不注意双方とも意味 - 外hors sensという共通の領域をもっており、この種の子どもには排除されたexclu場所以外に占める場所はない。フロイトの『ナルシシズム入門』(1914)によると、「理想の形成は自我の側からすると抑圧の条件となる」。昇昇について言うならば、これは理想の要請に叶うものであるが、理想がそれを強要するのではなく、「昇昇は抑圧によらずこの理想の要請に応えることができる」。『自我とエス』になるとフロイトは自我理想の形成に取りかかる。自我理想は自我から形成されるのであるが、それは一連の同一化を通じてである。同一化により、自我はエスに働きかけ諸対象を断念することとなる。一方で同一化はまた「自我が対象のしるしLes traitsを受け入れ、努めて自らをエスに対して愛の対象と認めるようにする。こうして自我は自らの喪失へと置き換え、こう言う、見よ、君はわたしを愛することが許されている。わたしはかくも対象に似ているから、と。ここでは対象に帰されたリビドーがナルシシズムへのリビドーへと転位している。『ナルシシズム入門』では、フロイトは両親のナルシシズムが再燃して、我が児を溺愛することで「麗しき我御子」his Majesty the Babyといった表現にもなってしまうのだが、これは理想自我へと至るものである。「そして今やこの理想自我へ自己愛'amour de soi(『自己愛』)と訳している人がいます。その場合、narcissismeは「自己愛」と訳し分けることもできます。またl'amour de soiを「自己愛」としnarcissismeを片仮名でナルシシズムと訳すこともでき、今回は小生はそうしました。いづれにせよ、これはフロイトのフランス訳上の問題であり、ラカン自身はl'amour de soiもnarcissisme primaireも少なくとも主体に關したるはこのような概念を認めてはいません)は向かうのであるが、幼少時には現実の自我がこれを享有していたjouissaitのである(フロイト、1922)。つまりナルシシズムはこの間に開たれる理想自我へと移動させられるのである。その際生じてくるのが「最初のそして最も重要な同一化、自分が生まれる前の父親への同一化であり・・・この同一化は直接になんかの媒体も経ないもので、あらゆる対象像よりも先行するもの(フロイト、1922)である。フロイトの説明により、幼児期は父親と母親は未分化であるとされる。この母親と主体の父親に対する同一化から自我は生まれる。この最初の同一化は『ナルシシズム入門』における説明に近いものと思われ、子どもが原初ナルシシズムを断念するのを助長する「最も重要な部分」であり、「去勢複合」le complexe de castrationと呼ばれる(フロイト、1914)。この同一化はエディプス複合を構成する同一化、つまり自我の父親への同一化、あるいは母親への同一化、さらには両者への同一化によって強化されるが、その組み合わせは、複合が単純なものかセットとなっているものか、陽性的なものかその反対のものも含むかいはなかっていく。自我理想はいわば「エディプス複合の継承物」であり、それ自体の解消も必然的なものである。これら父親あるいは母親へのさらには両者への同一化を子どもは自我理想の誕生とともに、単にイメージとしてだけでなく、禁止、さらには社交性、宗教、道徳、社会常識といった人間にとって高次の主要特性として身につけることとなるのである。

ついでコンダはいわゆる鏡像段階について説明しているがこの部分は省きます(鏡像段階に関するラカンの説明も深化があり、光学シエーマの理解からカントが人間の超越論的直観というものがいかに現実を歪めているか - これは理論理性に関わることですが、すでにセミナーVII巻において実践理性における現実le réelと観智界に指定されていた法のもと、理論理性のフェノメナールな世界では不可知なdas Dingはカントにおいては実践理性の領域では奪回できるものとされるますが、フロイトが言う快楽原則の彼岸にまで、つまりフロイトの現実原則における現実とはまったく別物の現実le réelにまで足を運ぶとこれはla Choseなのであり、つまりどうしようもないimpossibleのものであり、法はあえて言うならばアウト・ロウな世界における法となることが明らかにされました - そしてこの歪みを説明するためにラカンはまず曲面のトポロジーに依拠したのです。これはセミナーIX、X巻の時期にあたり、光学シエーマについてはつきりとした結論が出るのが『エクリ』所収の『ダニエル、ラガーシュの報告についての指摘』であり、これも同時期のものです。セミナーX巻では鏡像段階の説明において、<他者>=母親の承認についてまで加わるのは、光学シエーマからの収穫と考えることができます。その後ラカンは現実の論理は二個論理では解決できず「性的関係はない」という定式に導かれます。ある意味でこれをスマートにイメージできるものが三輪のポトメオの輪でした。この時点でラカンは幾重にもフロイトを超えていたかのように見えます。三つ輪のポトメオの輪はラカンのポトメオの輪、四つ輪ポトメオの輪はフロイトのポトメオの輪とよべれます。が、ジューツァンスの多発(Theódora Pernessisのバリ大8での精神分析博士号取得のための論文では少なくとも47以上ラカンのジューツァンスおよびjouirを含むタームがラカンには認められることが書かれています)、その意味le sensを巡ってかれは精神分析の限界と、父親をに対する神経症的葛藤に苛まれるようになっていき、結局「精神分析の父」であるフロイトの顔を立てることとなります。フロイト自身のいわゆる「アクトロリス体験」をラカンは分析でできていたのかどうかです。ラカンにおける超-自我とジューツァンスについてはこれまた別稿で述べたいと思つています。

コンダの論文に戻ります。ラカンの教えによれば、あらゆる主体は構造的にある欠如によって支えられている。シニフィアンは主体を代表するとしても実際はこの主体のしるしのひとつun de ses traitsを固定するだけである。このしるしを通じて主体は自己を象徴的に同一化し・・・つまりその他すべての性質は身体の実現あるいはその鏡像を構成することにはあれこうした性質は失われてゆく。主体はここで、ラカンが言うのは、「シニフィアンの省略élisionによって」構成され(ラカン、1960、les Écrits, p.677)、一方で、「両性の貯蔵庫」は母親の言説によって「他者」の側に属することになり、「主体はそのなかに自分の居場所をみつめるのだが」(ibid., p.679)。主体はこの場所を欠如として設けざるを得ない。母親は、子どもの泣き声を聞き、この子のことはよく判っているものと信じ、この泣き声を要求、助けを求めると聞きと解釈し泣き声に言葉の装いを与え、人間的なものとして扱う。こうしてまだ小

さな子どもにも身体の現実において言語が結びつけられる。ひとつのしるしによって成立する主体の象徴的同一化は、事実、原初的喪失に構造的に随行するものである。そしてこの原初的喪失をラカンは対象aと呼ぶ。鏡像と同様、身体の現実も言語の<法>の一擧による喪失によって一歩を踏み出すのである。

これと同時に、母親その場を離れ、わが子に直には満足を与えることをしなくなる。父親が性行為のための女を呼び寄せるからである。子どもが具現することも所有することもできないもの、それがファロスである。ファロスはベニスのイメージの消されたものであり、これが鏡像にも認められる。言語における性に結びついた喪失がファロスでありこれは解剖学的位置として脱落性のイメージを持つ幻想と関連しており、最初の隠喩である父親の隠喩を通じて<父親の<名>は子どもにとってシニフィアンとして母親における欠如を代表することとなる。

付記すると、この脱落性caducitéという表現によりファロスも対象となり得ますし、後年、ラカンはファロスをトポロジー上、身体-外hors-corpsと位置づけたことも重なります。次いでコンダは「度を越す」déborderと「●●の手に負えない」se laisser déborderという表現を重視しますが、後者はADHDの子どもの母親がまさに訴える言葉だからです。子ども-主体が欠如に同一化するためには母親は忙殺されているからで、他からお呼び(例えば上述したような父親との性行為のために)がかかるからです。しかしながら(ADHDの子どものケースでは)子どもはいきなり問題を持ち込むようにします。ADHDの子どもは、主体の位置にありながら、母親がこの子について予測する限界を超えて度を越して動くからです。去勢は結び目の動きです。(ポロメオの輪が三方向に外に向かって引っ張られ)結び目が失われた対象を締め付け、象徴的代表的、そして言語の<法>の領域において、原初的欠如がとりもたせられるのです。

コンダが言わんとするのは、母親は子どもを離れ、子どものもとでは不在になり(s'absenter)になることにより、理想、その同一化、欠如した対象の断念、存在欠如manque à êtreとしての主体の成立が、ADHDの子どものケースとは、母親は常に子どもに呼び戻され、このプロセスが無効になっているさまであり、Bergèsが多動な子どもの両親から相談を受けたときにする質問「あなたたちは眼に届かないものをご存知ですか」とそれを否定する両親についての「まったく手に負えない欲望le désir le plus dur」から、子どもが期待される居場所là où il est attenduと子どもが現に今いるところlà où il estとの乖離が存在しなくなることで、子どもは<父親の<名>の隠喩が働かない母親の欲望の対象のままに止まるというADHDの子どもと親とのあいだの構造的問題性でしょうが、そこに後期ラカンの結び目理論に基づく精神分析上のテクニクを中途半端に援用している様が露呈しています。「意味」le sensにせよ、「無-意味」あるいは「意味-外」という言葉を羅列してはいますが、「意味」についてのラカンの教えを振り下げていません。ラカンによれば、「結び目を締め付ける」ことは「意味」を減じさせる効果的な分析的テクニクであり、それは症状の氾濫に歯止めを効かせるための技法なのです。「症状」についてラカンはいろいろ述べていますが、「意味」との関連上重要なことは、「症状」とは端的に分析主体が訴える「うまく行っていません」Ça ne marche pasということば=要求ですし、この場合の分析主体とは母親であるはず。このことは次にアップする拙論を読んでください。

余談ですが、現在日本はリスク管理について学校であれ職場であれ、つねに«compliance»重視へと向かいます。英語complianceは「服従」、「遵守」、「依従」等々の語義がありますし、今の日本のcomplianceがなにに服従、なにを遵守、なにに依従かというそれは人間の主体を限りなくゼロになるまで「締め付ける」エクリチュールであり、そのエクリチュールは何処発かというところ、官僚機構であったり、マスコミであったり、あるいは官僚マスコミ複合体との表現も可能でしょうか ●● 事実、コンプライアンス上、ストレスチェックは個人情報漏洩のリスク管理上外部委託業者に頼らざるを得ません。それでリスクは本当に管理されるのかどうか ●● ?安倍首相はG7の伊勢志摩サミットで、「世界経済の現状は08年のリーマン危機の前の状況に似ている」として、「各国の財政出動で経済を活性化させる必要がある」といった趣旨の発言を議長国を代表して共同声明としたことがこの前段の「リーマン危機云々」は折り込まれませんでした。消費税云々は問いませんが、危機に対して「前もって財政出動」といった文言(誰のあるいは何処からの発案なのかわかりませんが)がもっともらしく聞こえてしまうのが今の我が国の状況です。メルケルさんがどう考えていたのかわかりませんが、「危機到来したときのために財政を健全化しその上で財政出動できるよう余裕をもつ」ことがなにより必要なのかもしれません。ラカンに即して言えば、鏡像(a)の心、(あるいは自閉症の場合ですと「緑」bord(へ)のリビドーの過備給は問題で、リビドーの貯蔵rèserveを十分なものにしておいて、随時必要な備給を行うことが望ましい、といったことが「不安」のセミネールでも述べられています。ラカンがもしいたら、かれもメルケルさんに賛成していたでしょう。子どもの場合「安全」に対する危機管理がいたるところで、さまざまなコンプライアンスによってむしろ雇止めになっています。小生の診療所で日頃受診なさる成人期ADHDの患者さん多くは、子どものときに多動傾向があまりなかったか方たちです。一概に言えませんが、寧ろ多動傾向があった/あるADHDかたの方々が、仕事の達成率についていえば、先にも書きましたように失礼を顧みず申し上げますが「下手な鉄砲数打当たる」式で、「石ばしを叩いて渡らない」式より上ります。こんなことを書くとはツラいものかもしれませんが、子どもが興味を示すならば、お台場でスケボーをプロのかたたちから基礎からちゃんと習うことを小生は提唱いたします。スケボーは危険なスポーツです。プロの指導者のかたたちはまずこの「危険」についてまず子どもたちに徹底して指導しています。今の教育(学校 - 時期よりも改善されてきているような印象も受けず - でも家庭でも、つまり社会全体として)が「転ばぬ先の杖」を<他者>が子どもたちの主体の欠如を埋める形で「多動」より「不注意」が問題になる成人期ADHDの急増を助長しているものと小生は判じます。Francine Lussierという人が書いた「多動障害より良くとりなす gérerための100のアイデア」といった趣旨のタイトルの本を読みました。別稿で取り上げる予定ですが、著者自身がADHDである/あったため、説得力はありますが、あくまでかの女のアイデアであり、100のアイデア・シリーズの冊一ではないわばハウ・トゥーもので、小生としては参考本程度にといた推奨にとどめておきますが、かの女が子ども時代親から言われた言葉で問題だったとしているのは、例えば家族全員で海水浴に行つたと母親は「なぜそんなに遠く trop loinにまで行ってしまおう」、「Lisa(お姉ちゃんの名前でしよう)より沖にいつはだめ」、などです。多動は抑えては駄目だということでしょう。一理あります。

再びBergèsからの引用で「これら多動な子どもは言葉も身体も働かせないjouer avec. かれ等が働かせるのは欠如をもたらすものce qui manqueである」。親たちは自分たちのナルシズムが裏切られたかと、傷ついたと感ずるが、それは子どもがつねに彼らから逃れようとする行動からである、とのことですが、Bergèsがいうils jouent avec ce qui manqueは寧ろ主体の基本的構造を述べたことにならないでしょうか。問題はADHDの子どもは「待てない」ところが問題なのです。常に穴は埋まっていなくてはいけないので、空になる前にすでに行き当たりばったりでau hasard埋めるものを探し求めるのです。このau hasardは親から見ると特にそうなのであり、コンダはいみじくも述べています。鏡像において、子どものこの探索について、子どもはあたかも「母親の眼差しによって遠隔操作されているようなもので、つまりかの女は子どもの先を行き、後を追いかけるわけではない。子どもは眼差しの操縦のもとで動く動物ではない」と。日本語で言うならば、母親は常に子どもに対して「転ばぬ先の杖」なのであり。かの女が精神科医に、あるいは時に精神分析家に訴えるのは、この常に「転ばぬ先の杖」を演じていなくてはならないことであり、それはかの女の手に余る_se laisse déborderことであり、成人期になつてからは話は別ですが、子どものADHDにおいて、「症状の意味」が問題となつてきます - なぜここで意味を問題にするかといえば、コンダは多動は当の子どもにとって意味がないと言っているからです - についてラカンはLa Troisièmeのなかで、次のように述べています。

●●●症状の意味とは当の症状が増悪したり消失したりすることで治療者(分析家)に利益が転がり込んでくるような類のものではありません。症状の意味、それは現実です。現実はそのことで自らを際別に処し、満足していくようde façon satisfaisanteことと説明されるという意味においてところがうまく運ぶmarchent les chosesことを阻むように働きます。満足していくようにとは主人にとって満足していくようにです。

拙訳(ラ・トゥルワジエム)とは違う訳になってしまいましたが、今回の訳の方がベターと思います。精神分析はヒステリー者とともに始まります。ですからフロイトが精神分析の父だとしても、一連のヒステリー者に担がれ、勘違い的に「無意識の発見」と大見栄をはってしまいましたが、精神分析的な意味における症状とはまず第一にヒステリーの症状です。ヒステリーというものが時代とともに変貌し、現代のヒステリー者はクララカナルそれとは異なり、症状は顕現することではなく、控え目にしか示されません。しかし構造的には、そして社会的絆(絆し当つたlien social)をこわしましたが、絆といてこそそれそれの言説がうまく連帯することは全くないのがラカンの社会的絆(絆)です)もアクチュアルな問題として意識しておくべきです。もっとも昨今では医師も弁護士も指揮者でさえあまりmaîtreらしくなくなつてきています。だからヒステリーの言説も変わらざるを得ないとも言えます。一方で対象がコロコロ変わるという点ではこれをヒステリー的と表現することは可能でしょう。対象といつても欲望の対象ではありません。ラカン自身「不安」のセミネールでこの「欲望の対象」という表現を用いることを断念し、objet cause du désirに変わりました。いづれにせよ、ヒステリー者において対象とは、欲望のそれではなく同一化のそれが必要なのですが ●●●コンダに従うとしても、症状の意味が問題になってくるのは当の子どもにおいてではなく、母親においてのはずです。症状をめくって、そして子どもの場合どうなるのかは、Nodalという雑誌のNo2に掲載された“QUELQUES REMARQUES SUR LES SYMPTÔMES DE L'ENFANT”, Martine Lerumde (<http://www.freud-lacan.com/index.php/fr/publications/centre-documentaire/305-les-introductions/2213-quelques-remarques-sur-les-symptomes-de-l-enfant>)が参考になります。symptômeについてもsensについてもいづれ別稿にて認めるつもりです。

コンダはBergèsに倣って、多動の子どもは象徴界における欠如を巡って、取り巻きの言説の象徴的脆弱性が関与しているのではないかとし、消費される対象がこの欠如を埋め尽くし、語り続けることを阻んでいるトしていますが、こちら辺は同じくLa Troisièmeでの引用が役に立つのではないのでしょうか。わたしは症状とは現実界からやってくるものとしませう。ちょうど小魚が食欲旺盛で、意味を煩張っている限り口は閉じたままで請ることができないのに似ています。そこでふたつにひとつです。あるいは増殖し続ける(「産めよ増やせよ」と主は言われました。しかし大袈裟に捉えて眉をひそめることはありません。増殖といつても、主は心得ています。増殖とは小魚の大量発生ではないのです)か、あるいは小魚が丸太りになるかです。

La Troisièmeの三日前のプレス・インタビュー(Conférence de presse du Dr Lacan le 29 octobre 1974, v. <http://aejcpp.free.fr/lacan/1974-10-29.htm>)でラカンは「「真の」宗教(つまりカトリック)は意味を分泌し続けます。それによって信者は意味の海で溺れてしまうようにそうしているのです」と言います。宗教の勝利は精神分析の敗北に繋がります。このようなテリケートな問題は別稿で認めます(「意味」を巡って論ずるならば、この問題は外せばならないので必ずそうします)。

●●● 多種多様に遍在する対象に相対して、子どもたちは消費は原初的欠如が埋め尽くされるように思うであろうそれを大人たちはなすがままに傍観してしまふ。このことであらゆる不安は回避される(●●● sic)。子どもたちの眼と耳は視覚的、聴覚的刺激で飽和状態となつてしまふ。静寂は極めて稀な瞬間にすぎなくなる。多くのものは冷めた眼で、神も信じなくなり、体制はそれを承認する。こうして国家、政党、学校、司法機関、警察、医師、それぞれがそれ自身の都合で利用されることを強いられ、諸制度は保身を確立する。同様に子どももそのように利用される●●●子どもは親の価値基準を自らのものにせざるをえない。

ついでコンダは<他者>のジュイッサンスの孤島群Des îlots de jouissance Autreと題されたテーマにすぎませんが、îlotsという表現はJean-Claude Malevalというîlot de

compétence(“L'autiste et sa voix”, p.108, p.107, p.164, p.220)から借りてきているものでしょう。一方で、jouissance Autreとは如何なるものか。これについての小生の批判は稿を改めてどうこととして、とりあえずコンダの抄訳を運ねます。

鏡像は「リビドーが身体から対象へと流入するに際して導管の役割を果たす・・・勃起した器官はジュイッサンスの場を象徴化するものであるが、それ自体としてではなく、イメージとしてでもなく、欲望されたイメージの欠如した部分としてそのものである」(Lacan, 1966, p.822)。ファロスは身体を言語に結びつけ、言語の法に結びつけ、そこから同様にジュイッサンスの禁止を結びつける「去勢の意味するところは、ジュイッサンスが拒絶されるべきものであるということであるが、それは当のジュイッサンスが欲望の法とは逆の下の梯子に到達させるためである」(ibid. p.827)

TDAHの子どもにおいてはジュイッサンスはファロスのジュイッサンスの道を通じて放出されるのではない。ファロスのジュイッサンスは、去勢を刻印され、学業での知の獲得に加わることを可能にする。われわれが提唱するのは以下のごとである。これらの子どもたちにはジュイッサンスの島des flots de jouissanceというものが存在し、このジュイッサンスの島は身体ジュイッサンスを非ファロス化しラカンという「他者」のジュイッサンス(1975)とする。そしてわれわれが考えるに、注意欠如はこの「他者」のジュイッサンスの臨床的事実である。TDAH児は「他所に在る」、人間関係の場の外に在る、意味の外に在る。このジュイッサンスはラカンが神秘家のジュイッサンスと呼んだジュイッサンスであり、かれによれば、女性の側に在る。事実ラカンは男性のジュイッサンスと女性のジュイッサンスをsexuationの式において区別しており、前者はファロスのジュイッサンス、後者は構造的に「全てではない」pas-toutであるとしている。

かなり乱暴なジュイッサンスの説明とこの語の援用であることだけここで述べておきます。

Bergès: 多動な子どもがいたらこうすればよい。放り出すとか驚愕にさせるよりも死について語るが良い、30分以上上らせて話を聞かせるのだ。もあるのだ。死はジュイッサンスと隣り合わせであり、あるいは「他者」との再会の意味を持ち、かたやこれとは全く反対に、主体の到来のときである。ことばの主体が到来するためには、存在の側において何か死が死ななければならないのだから。運動は眠らないための闘い、死に対する闘いであり、あるいは反対にジュイッサンスに委身をやつすことではないしあるいはそれを諦めることでもない。こう考えたい、つまり多動とはこの「他の」ジュイッサンスjouissance Autreから抜け出そうとする試みでありそこに耽溺しようとするのではない。欠如との関わりにおいて子どもは鏡像を見て喜ぶ。かれは無声映画を上映するのだが、無声ということは象徴化の一手手前なのであり、自己愛un replis autoérotiqueがつくる齟齬とそこからの分離、独立との境に位置する。この運動から可能になる道もあるのだが、それはリビドーがファロスという配管につながるのだが、子どもが喋ることができず、鏡の前でひとり佇んでいるままだと、リビドーは方向感の欠けた運動に走ってしまう。ここでもある種の死の欲動というものが不和をもたらし弛まない運動を引き起こし、つまり死の欲動が生に奉仕しているのだと言うこともできる。次いでTDAHと行為l'acteとの関係といったタイトルのもとに次のような展開がみられます。

多動とは行為acteではない。TDAHの臨床像には意味の外にあり言語外のものである。であるからこの運動は症状とは看做せない。意味の外にあるのだから子どもが身体をそこに巻き込むとしても、そのとき子どもは主体としているわけではない。

TDHAにおける多動は行為l'acteではない。行為化であれば、子どもは対象aに位置することになり現実「穴をあける」ことになるのだから。とはいえ多動の子どもは他にもまして行為化から保護されている訳ではないのだが、その運動は鏡のなかに自分を捉えようとするのであり、他者を鏡と看做しそこから運動を伴うある「イメージ」が返って来る。後に先にも、現実はそのことによって穴があくことはなく、鏡から脱出できる場所はないのである。

残るはアクティング・アウトの問題である。子どもはアクティング・アウトにおいてなにかを示そうとし、言えないなにかを上映しているのかもしれない。しかしこれが意味を前提しているともいえる。ある意味とは拒絶された言葉でありこれが上映されているともいえる。運動乱発agitationの最中、子どもは鏡のなかにおける過去の経験の「反復」を徹底し上演するが、映し出されたイメージはこれも動揺して固定されない。つまり子どもが欠如を相手にしていて、ファロスの想像的再現を上演しているとするなら、この上演にはなんら隠された台本がある訳ではない。目撃する者にはこのことが明らかなのだが、それでもかれ等の視線はそこに集まる。この劇はいわば不条理劇のようなものであり、結末の台詞は幕開きの台詞とまったく同じであり観客は幕切れにおいて何も起こらなかったのではと訝ることとなる。そもそも子どもも観客にはなにも期待していないし拍手喝采など御免こうむりたいといった風だ。逆に、ある瞬間まったく別なところでの上演が目を引く。それはアクティング・アウトでもありときに行為化ともいえる類であり、母親の欲望のそれである。母親が「この子が足をバタバタするのを止めること」が自分にはできないと訴え、いつもとんでもないことが起こると予知することに頼るというシーンの上映である。それゆえBergèsは強調する。つまり両親の話を聞く必要性があり、かれ等こそ主体=患者なのだ。

フロイトとラカンに照らし合わせ臨床的観察、分析を行ってゆくと、DSMにもとづいてTDHAに該当する子どもから一定の構造を読み取ることができる。この構造によると対象とジュイッサンスとの関係において主体は一旦そこに到達するかと思うと再び身を引いてしまい、語るところまで発展を遂げない。子どもは語る主体とは成り得ない。欠如との関係を象徴的次元において築くことができないからである。取り巻きの言説における象徴的なものの脆弱性がおそらく関与しているのであろう。消費されるべき対象は欠如を満杯にすることとなる。TDAHで我々の目に映るものとはflots de jouissance Autreとこの子どもの主体的同一性の配置における欠陥との結びつきの病的表現である。TDAHの子どもは「他所に」いて関係の場の外、意味の外に在る。鏡像との向かい合いのなかに囚われ人となってしまう、このシーンを再現し、そこでは過去において、子どもは運動を通じて言語のなかで捉えることができるあるイメージを自らに獲得することもできたはずである。しかしもしかれがこのシーンを演じ続けるとなると、それは捉えどころがなく要求は発せられず他者への語りかけもいままともなる。要となる問題は、どのような性質の鏡に他者l'autreは現れてくるのかである。もしこの他者が運動を解釈し子どもに意味を与えれば、この機制は永遠に繰り返されることになり、この子どもは際限のない運動を続け、永遠に続き想像的でパラノイア的傾向に傾く次元との関係が固定させる。TDAH児は手に負えない子どもである。「おとながこの子どもを多動だと捉えれば捉えるだけそれだけ子どもが喋ることを阻むことになる」(Bergès (1995), 2010, p. 44)。これとは違って子どもをリラックスさせ、「他者」の言説のもとで休息をあたえることができ、そこで喪失、死が演じられ、象徴化されるとき、子どもは眠りに入る。であるから分析の枠組みのなかにおいて、他者が、いつか、「他者」の場所 - 分析家が穴をあけることができるのはこの場所である - を体現することだけにとどめるのを受け入れるならば、子どものなかで転移が再度記載されこれは、欠如として働くことになる。ウィニコットのいう快適な「移行的空間」のなかで、子どもが、この「他者」の場所を引き受けた分析家の言説のなかで自分が描かれ、しかも欠如として描かれるのを見出し、たとえ分析家がこの子に持て余すことがあってもこれを許せば、子どもに言語の道が開かれ主体の場所を占めることが可能になる。

以上、急ぎ足ですが、アニエス・コンダの論文の紹介でした。次はこれに対するやや批判的な拙論をアップいたします。